所員の自著紹介

『中国人日本留学史研究の現段階』

大里浩秋，孫安石編著
御茶の水書房2002年5月31日（447頁）

ほぼ100年前，中国からどっと留学生が日本に押しかけてきて，日本語学校や下宿屋が盛況を極め，大学もその受け入れに大わらわとなった時期があった。何やら今に通じる現象だったといえなくもないが，その頃は祖国の危機を救う妙策として留学がとらえられており，没落寸前の清朝は学費を援助する代りに監督処を設けてわき目もふらずに勉学に励むよう管理を厳しくした。それに応えてかどうか，留学生は日本各地の大学，専門学校や官庁内の講習所に通って，専門知識を身につけて祖国に帰って行った。受け入れた学校も熱心に教育した様子がうかがえる。といっても，学業を放棄して清朝打倒の革命運動に参加する学生も一部にはいた。

それ以来，日本が日中戦争をおこしそれに敗北する時期に至っても中国からの留学が続くが，その時々の留学生の動きおよび日中双方の政府や民間の彼らへの対応を，さまざまな角度から明らかにすべく書いた9篇の論文と2組の資料の目録で構成したのが，この本である。科研費を得た共同研究の成果報告として，人文学会のミレニアム記念出版助成を得て公刊されたものだが，現在この続編を書きたくて調査研究を行っているところである。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

『基本語英会話 Be, Have, Go, Go!』

水野光晴著
増進会出版社　2003年12月（287頁）

英語圏の人々が日常生活で最も頻繁に使用する英語の基本語彙のうち，英文構成の上でとりわけ重要なパラミーター（前置詞や副詞などの仲介語）と，基本動詞の計50語を中心にした短文の日英対比例文を解説したものである。とくに本書は，日本人の英語発信に，21世紀の国際共通語としてかねてから提唱しているグローバル・イングリッシュ1000語の例文の内在化が不可欠であるという筆者の信念にもとづいている。本書の構成は，迅速な英文の生成・理解を促進するアプローチとして筆者がここ十年来提唱しているバイリンガル・センテンス・アナリシスの手法にもとづいている。

合理的に英文の内在化を図る場合，毎日一定量の日英対比例文をイメージトレーニングによって反復練習することが不可欠である。また，本書はマジックナンバー（最良の記憶の定着率）をペースメーカーとして1日分の学習量を設定してある。本書の例文の意味を，イメージトレーニングして，英文の反復練習を1日も怠らなければ，英会話は間違いなく自由自在になる。つまり，本書のアプローチは，いつでも，どこでも，誰もが自己ペースでストレスを覚えることなく参加できる，環境にやさしい民主的な学習法である。

幸運にも，発売一ヵ月後の本書の週間売上高は，八重洲のブックセンターで全ジャンルベスト7位，アマゾン・コムの読本，解釈，会話部門でもベスト9位，紀伊國屋書店の会話部門でベスト7位に入るなど，なかなか好評である。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

『中国のしくみが手短にわかる講座』

田畑光永著
ナツメ社　2003年3月12日（262頁）

中国の歴史，現状，課題などを一般向けにわか